

“多主語的”なアジアが硬直した文化を突破する

文化とは古来、国や地域、世代に固有のものであると同時に、たがいの影響関係のなか、新たなかたちへ常に変わり続けているという面も、見逃すことができない。近年は、日本の大学や大学院へ留学してくるアジア系の若者が急増しているが、そこでの教育は西欧を規範にした近代日本文化の一方的な押し付けになってはいないだろうか。たんなる知識や情報、技術や資格の伝達にとどまらない、相互の吸収と学びへの試み、デザイン教育によりアジアと日本の新たな絆を築く、ひとつの創造的な挑戦を取材した。

インタビュー

[神戸芸術工科大学アジアデザイン研究所長・教授]

黄國賓 Huang Kuo-Pin

[同大学芸術工学部ビジュアルデザイン学科教授]

赤崎正一 Akazaki Shoichi

大山直美=取材・執筆 宮村政徳=撮影



の流れをくむドイツのウルム造形大学で教鞭を執った経験が、直接のきっかけだったと思います」

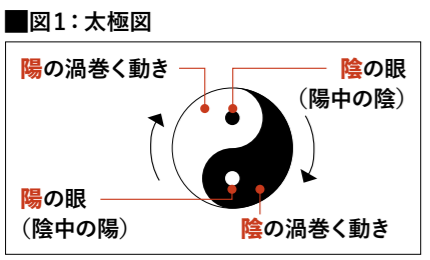
太極図のごとく ——自らの内なるよそ者の発見

ウルム造形大学は、その最も先端的な継承の場。若き杉浦さんにとって、何よりの憧れの場所でもあった。が、その憧れの場所で、杉浦さんは大きな違和感に遭遇する。赤崎さんによれば、それは杉浦さんが自らのなかに、近代欧米のデザインや思想と相容れないものを発見した瞬間だったという。

これはインタビューなどで何度か語られていることだが、当時、杉浦さんはウルムの学生にしばしば自分のアイデアについて「ヤー・オーダー・ナイン」（イエスカノーカ）、つまりいいか悪いか、



フランスで開催された「伝統と現代技術——日本のグラフィックデザイナー12人展」(1984年)に出品されたポスター。杉浦康平の代表作のひとつであり、アジア的な空間と時間がモダンデザインの極致と融合した象徴的作品(イラストレーション=渡辺富士雄、デザイン協力=谷村彰彦)。提供/神戸芸術工科大学アジアデザイン研究所



陰と陽という渦巻くふたつの力。一方、それぞれの内には「陽中の陰、陰中の陽」が存在し、循環と調和のダイナミズムを生み出しているという。

日本—アジア—欧米という文脈のなかで

日本とアジア各国は、長い歴史のなかでたがいに刺激を与え合ってきた。日本の高等教育機関に在籍する留学生の9割をアジア圏出身者が占める[*1]。昨今、大学のキャンパスもまた、よそ者同士の交流の場といえるかもしれない。そうしたなか、デザインを軸に、アジアの若者たちが各国の伝統や文化を学び、知恵や情報を交換する場を目指してつくられた、ユニークな研究所が神戸芸術工科大学にはある。

その名も「アジアデザイン研究所」。今も現役のグラフィックデザイン界の重鎮で、アジア画像学研究の第一人者としても知られる杉浦康平さんが中心になって約10年前に設立された。現在、杉浦さんの後を受け継いで同研究所長を務める黄國賓さんと、杉浦康平さんのデザイン事務所出身で同大学教授でもある赤崎正一さんに、アジアデザイン研究所が育ててきたさまざまなつながり、果たしてきた役割について話を伺った。

「アジアデザイン研究所は大学や大学院とは切り離された独立した研究組織で、杉浦康平さんが一貫して展開してきたデザインワークから画像学に至る、アジア的なものへの関心と、それに対するアプローチから生まれた独特の研究の場と云っていいでしょう」

そう語るのは、ご自身も同大学の3期生で、大学院で博士号を取得した杉浦さんの研究室出身の黄さん。一方、長年にわたり杉浦さんと行動を共にしてきた赤崎さんは、そうしたアジアに対する関心の出発点を次のようにみる。

どちらか言ってくれと求められ、おおいに迷ったそう。そこで、そのたび「フェライヒト」(英語の Peinhardt だぶん、こうだろう)と、東洋的な曖昧さをのぞかせつつ答えていたところ、「パーハプス先生」といういささか揶揄的な異名を贈られたという。

「そうしたなかで杉浦さんは、ヨーロッパ的なものの見方と自分の内にあるものとのズレを強く感じたんですね。近代デザインは、日本人のなかにもそうとう深く根を下ろしていますが、はたしてそれ以前にわれわれの根っこはないのか。今でこそ多くの人が気づきはじめていることに、最初に、しかも非常に若い時期に疑いを持ったのが杉浦さんでした。いわばヨーロッパの他者の立場から近代デザインを相対化し、もっと過去から続いていたアジア的な基準のなかで、デザインのアイデアや思想を探究しようとしたわけです」

それは、アジアを代表するシンボル「太極図」の思想とも通じるかもしれない。太極図は陽と陰のふたつの力のあり方を示すが、両者は対立というより循環・調和の関係にある。しかも両者には「陽中の陰、陰中の陽」といって、たがいの力の一部が内在し、これが全体としての循環と調和をもたらす起動力になっているという(図1)。

すなわち、自分をどちらか一方に固定するのではなく、常に揺れ動く存在として捉えること。日本のデザイン界を牽引してきた杉浦さん自身も、若かりし頃に自分の内なる「よそ者」を発見したことが、デザインの方向性を大きく変えるきっかけになったというのは興味深い。個人や国のアイデンティティや文化のあり方には、自己(自我)中心主義を超えた内なる他者の発見が重要な意味をもつのだ。

「多主語的」アジア

「18世紀以降、世界はもっぱら西欧的な近代文明の洗礼を受けてきました。その間、戦争や紛争や飢餓は絶えることなく、今なお地球のいたるところで起こっています。一方で、近年は中国や韓国やインド、あるいは東南アジア諸国なども急速な発展を見せていますが、このままでは西欧と同じ近代化の道を進み、自分たちの大切な伝統や精神性は破壊されかねない。われわれ東洋人には、西欧的な自己（自我）中心主義とは大きく異なる「多主語的」な考え方があります。今の世の中の困難な状況を変えるには、そうしたアジア的な思考をヒントに、可能性を探っていくべきではないか。そうした考えから、この研究所はつくられたのです」

黄さんの言う「多主語的」とは、たとえば作品には当然のごとく自分だけの署名を入れ、我ひとりを主語とするような西欧に対し、デザインも美術も個人を超えた多くの無名の人々すべてが主語になり、時代を超えて受け継いでいく——そんなアジア特有の発想だという。それはまた杉浦さんの思想の根本であり、アジアデザイン研究所の基本的な考え方を象徴するキーワード「一即二即多即一」あるいは「而二不二（二にして一）」という言葉にも通ずるものがある（図2）。

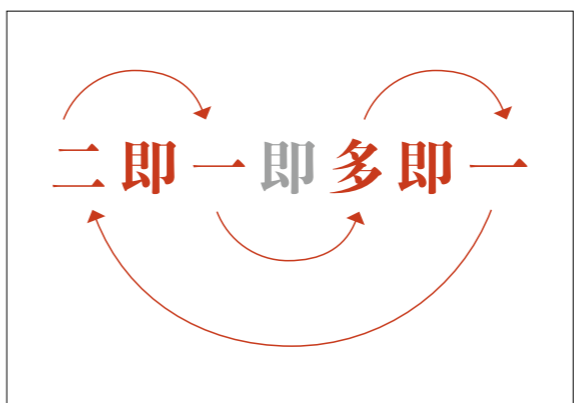
もともとアジアには、ふたつ（以上）に見えるものも実はひとつであるという考え方が古くからあった。たとえば太極図に見る陰と陽、天と地、日と月といった一対の密接なつながり。私たち自身の体にしても右半身と左半身のふたつに分かれるが、手を合わせればひとつにつながる。西欧の

ように自分と他者を画然と分けて考えるのではなく、つながり、混沌、それらを含めた大きな流れのなかで物事を捉える「多主語的」な見方が重要ということだ。

「多主語的な関係というのは、仏教学者の鎌田茂雄さんが言う『因陀羅網』にも通じます。『華嚴經』「*3」に書かれたこの宝の網は、ひとつの点を持ち上げると無限にあらゆる点からみ合っただり持ち上がる。Aという点を中心にするれば、Bは伴（脇役）ですが、Bを中心にするれば今度はほかの点が伴になるという具合に、主従の関係はその都度変化しつつ、すべての点に関係していることに変わりはありません。このように常にたがいに共創的であるというのが、多主語的な関係といえるでしょう」

こうした考えを基礎に、アジアデザイン研究

■図2：一即二即多即一



すべてのものは「一」であり、「二」であり、「多」でもあり、同時にまた「一」でもあるという思想。一見矛盾し合うものが、溶け合い、一体化する発想は、西欧的自己（自我）中心主義とは異なる「多主語的」考え方だ。

日本だけでは見えない、文化の源流を探る試み

これらアジア的な思考方法は研究所のみならず、黄さんや赤崎さんが指導する学部・大学院でも研究の基本姿勢となり、これまでに展覧会、講演会、シンポジウム、出版など、多様な形で研究の成果が発表されてきた。

たとえば、アジアデザイン研究所の設立準備期間から開設直後にかけては、瀬戸内海沿岸に残るきらびやかで豪壮な「太鼓台」とそのルーツとしての「山車」をテーマに、アジア文化圏に共通



の祭礼装置のデザインに着目、アジア各国の研究者との密度の濃い意見交換を行った。こうした独特の宇宙観や神話が色濃く反映された山車の造形は、日本だけでなく、中国、バリ、イラン、インド、タイなど、アジア各国で見られるという。この研究成果は、のちに『靈獣が運ぶアジアの山車——この世とあの世を結ぶもの』（工作舎刊）として出版されてもいる。

「アジアの文化は多く源流を共有して、インドから中国、韓国、そして日本に渡ったものがたくさんあります。今、日本には、民俗学の視点から祭りを研究している方は大勢いますが、デザインや造形の視点から掘り下けている人はほとんどいない。日本という狭い範囲だけを対象にしていたのでは、アジア全体に及ぶ巨大な流れを捉えられないので、じつはこれは重要な視点です。たとえば文字で書かれた文献がなくても、デザインや形からわかることがある。よそ者同士としか見えなかったアジア各国が、たがいの内にある異文化を発見し合うことで、共通の表現の手法が見えてくると



太鼓台の模型。実物の太鼓台は、大きいもので高さ5.5メートル、長さ12メートル、重さ6トンにも及ぶ。4本柱のヤグラの内に太鼓を置き、上方に布団（ふとん）を重ね、巻きつけて逆三角形にした形態は仏教の宇宙観における須弥山をかたどっているという。

というのが、私たちの研究所の基本的な考え方であり、このようなユニークな研究をしている大学は、日本でもここだけだと思います」

黄さんの言葉を受けた赤崎さんは、この山車の研究について次のように分析する。

「杉浦さんは、山車のデザインは仏教の宇宙観において世界の中央にそびえるという須弥山の形から来ていると想定しました。黄さんの言葉どおり、それを文献で証明することは不可能なので、アジア各地の多様な事例を集めては、想像力によってイメージを涉猟し、図像的・造形的な類似性を発見していったんです。初めは非常に個人的な関心と気づきから始まった研究が、シンポジウムなどで語り合われ、本にすることで、人と人、国と国、文化と文化を結びつけ、体系と広がりを生み出していく。そういう場として、アジアデザイン研

究所が果たす意味は大きいと思います」

現在、研究所では新たなテーマとして、アジア各国の儀式や芸能の際の冠など「かぶりもの」に注目。前出の山車とも通ずる宇宙模型的な造形上の特性について、この5年ほど、継続的な研究活動を行っている。

異なる時代、地域、技術との出会いが創出するもの

黄さんによれば、現在、大学院の修士課程・博士課程あわせて89人、黄さんが担当している大学院生は9人いるが、うち8人を中国人が占めている。ここでも他大学と同様、おもにアジア各国の学生が刺激を受ける場として、日本の教育・研究機関が選ばれているというのが現状のようだ。では、同大学院に在籍するアジアからの留学生





神戸芸術工科大学が中心となった、2019年度の日中韓台4大学国際総合プロジェクト「都市景観形成地区 奈良町の保存と活用の可能性」発表イベントのためのポスター。提供/神戸芸術工科大学アジアデザイン研究所

は、実際にどのような研究をしているのだろうか。研究室の学生たちは「文化とデザインの関係」を基本に、さまざまな個別のテーマを掲げて研究を行っているという。

たとえば、ある学生の卒業論文のテーマは「魏碑書体の研究とフォント」。4世紀から6世紀にかけて栄えた北魏の時代の石碑に書かれた文字の書体が魅力的だと着目し、碑文の拓本などの材料を収集・分析したうえで、自分なりに400種類の文字を再現した。将来は、これを汎用できるようフォント化することを目指しているそうだ。

一方、「中国の木版年画」について研究した学生もいる。かつての中国では新年を迎えるにあたり、吉祥や寿を表す絵「年画」を木版画印刷の手法でつくり、家のあちこちに貼る習俗があったが、現在はすたれ、職人も減少。すべての版が手彫りのため、コストが高いことも衰退の一因だ。そこで、この学生は伝統文化を存続させるにはコストを下げる方法を編み出せばいいと考え、最新

のレーザーカッターで木版をつくる表現手法にたどり着いたのだ。

「卒業時には、自分でデザインした年画の大作を制作しました。レーザーカッターなら細部も表現できるし、出来栄は手彫りの年画の最高レベルにも匹敵します」と教え子の成果をたたえる黄さん。先のフォントもレーザーカッターも、たんに現代の技術を駆使してデザインするというだけでなく、伝統文化を研究し、それをどうすれば継承できるか、考察を重ねたうえで形にした点に大きな価値がある。ここでもまた、自らの内なる異文化に手をかりに、新たな価値を生み出すという作業が行われている。

もうひとつ、大学院生が参加して年1回行っている「国際総合プロジェクト」についても、黄さんが2019年度の研究例を紹介してくれた。このプロジェクトは日本、中国、韓国、台湾の4大学が合同で開催しており、今年で10目を迎えたという。4つの大学のいずれかがホスト校となり、地元の特地域で見学、調査、フィールドワークなどを行い、地域社会の課題を発見。それを解決する提案を研究発表会で報告するというもので、今年には神戸芸術工科大学がホスト役を務め、都市景観形成地区に指定された奈良市の旧市街「奈良町」の町並み保存と活用の可能性を考察したという。

報告書には、4校の学生5人を基本に編成されたグループごとに、国籍や大学、専門分野を超えたさまざまな提案が展開されている。景観になじむ電柱や標識のデザインを考えたり、居住者のプライバシーを守りつつ観光客と住民をつなぐ場のあるまちづくりを構想するなど、提案自体も興味深い。それ以前に、相互のコミュニケーション

対立と対峙を超えた「而二不」の関係へ

こうした大学間のネットワークが生まれた背景には、杉浦さんが所長を務めた時代から同研究所が中国、韓国、台湾のデザイナーたちと交流を重ねてきたことが大きく貢献している、と赤崎さんは言う。人と人のつながりがさらに大きなネットワークを構築するというあり方は、まさに「多主語的」だ。留学生たちの多くは神戸芸術工科大学にアジアデザイン研究所があることを知ったうえで、同大学・大学院への留学を志望してくるといい、設立約10年を経て、同研究所はデザインという領域におけるアジア各国の「ハブ」として大きな役割を果たしているといえるだろう。

一方で、残念ながら近年の日本とアジア各国との関係は、いい意味での「よそ者」として刺激を

与え合っているとはいいたい。こうした状況を打破し、ある種の絆が構築されるような関係を築くには、何が必要なのだろうか？

黄さんによれば、そこでもやはり大切なのは「アジアの多主語的な考え方」だという。「赤崎先生や私は大学で教えるかたわら、本を中心にデザインの仕事をしていますが、本を作るには編集者をはじめ、文章を書く人、イラストを描く人、写真を撮る人、印刷する人など、たくさんの方が関わっています。さらに、できあがった本を売る人もいて、最後には買って読む人がいる。自分だけが主人公で、ほかはすべて脇役——というのではなく、誰もが主語になりうるし、たがいに重なって層をなすように、絆を構築しているのです」

社会情勢によって留学生数に多少の変動はあるものの、アジアデザイン研究所を擁する神戸芸術工科大学を目指し、今後も大勢の学生がアジア



この10年間、各国の研究者たちと共同で行ってきた研究はアジア全域をカバーし、その対象もじつにさまざま。その成果はシンポジウムや各種メディアを通じて発表され、内外の注目を集めている。提供/神戸芸術工科大学アジアデザイン研究所 (17頁、18頁とも)



を通じて学生たちが大きな刺激を受けたであろうことは容易に想像がつく。

「アジアのほかの国の先生や学生が町を見ると、やはり日本人が見ているものとは違うものが見えてきますから、日本人だけで行うプロジェクトとは違った成果が得られます。今は報告書を奈良市長に提出して、採用できる案があれば検討してもらえよう準備を進めているところですよ」と黄さんはプロジェクトの展望を語る。

各国から訪れ、それぞれ個別のテーマを掲げて意欲的に研究を行う。その多彩さが、西欧的なものにとつて「よそ者」であるアジア独自の力強い歩みへとつながっていくかもしれない。たんに対立・対峙する関係ではなく、たがいが内なる他者「陽中の陰、陰中の陽」を意識し合う「而二不」(二即二即多即一)の発想によって、日本とアジア、そして世界との新たなつながりを生み出す。今日、グローバルとナショナルの間で揺れる「文化」の新しいかたちは、その先にこそ見つかるはずだ。

注
*1 独立行政法人日本学生支援機構「平成29年度外国人留学生在籍状況調査結果」より。
*2 ドイツ工作連盟(DWB)は20世紀前半に設立され、多くの建築家やデザイナーによってモダンデザインの礎を築いた団体。パウハウスの中心人物ヴァルター・グロピウスもDWBに参加していた。
*3 仏教の經典のひとつで、極小の一点の中に全宇宙が存在するという、独特の空間・時間認識を説く。ちなみに、因陀羅すなわちインドラとは帝釈天(たいしやくてん)のことを指す。



黄賓
ファン・クオピン
神戸芸術工科大学アジアデザイン研究所長。同大学院芸術工学研究科教授(2016年より)。芸術工学博士。1967年生まれ。97年、神戸芸術工科大学大学院芸術工学研究科総合デザイン専攻修了。2005年、同研究科博士課程修了。同大学院工学研究科を経て、2018年より現職。



赤崎正一
あかさき・しょういち
神戸芸術工科大学芸術工学部ビジュアルデザイン学科教授。1951年生まれ。武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業。1976〜96年、杉浦康平プラサイズに在籍。2006年より現職。雑誌『世界』(岩波書店)などがある。